



TITLE:

フィジオクラートの價值論(下)

AUTHOR(S):

山本, 勝市

CITATION:

山本, 勝市. フィジオクラートの價值論(下). 經濟論叢 1928, 26(4): 661-672

ISSUE DATE:

1928-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128809>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷六十二第

行發日一月四年三和昭

論叢

臺灣の小作制度

法學博士

河田 嗣郎

相續税の補完としての贈與課税

法學博士

神戸 正雄

保険學の本質

經濟學博士

小島昌太郎

說苑

琉球の天然資源と人

法學博士

山本美越乃

コンツェルンに就いて

經濟學士

磯部 喜一

委任經理に就いて

經濟學士

楠見 一正

フィジオクラートの價值論

經濟學士

山本 勝市

雜錄

合理化方法としての經營設備の改造

經濟學士

大塚 一郎

法令

米及糧ノ輸入制限ニ關スル件・昭和三年勅令第二十號ノ施行ニ關スル件・前年度繰算ヲ施行スルノ件

フイジオクラートの價值論(下)

山本勝市

四 價值の分類

ルトローヌは、價值を二種に分ちて、固有價值及び出費價值の二となし、敢て之を市場價值と正常價值とに區分しない。市場價值正常價值の區分は、後に多くの經濟學者の行ふ所であり、ルトローヌ以前に於てすでに、カンチヨンの爲せる所であるが、ルトローヌは之にならなかつたのである。

彼が固有價值といふのは、ある事物が、農民の手に於てすでに持つ價值のことであり、出費價值とは、その後運搬、加工等によつて加はれる價值を意味する。彼のとく所は甚だ簡單であるが、彼の色々な文句から推して、私は左様に解釋して居る。然らば、彼れが、事物の價值をば、斯様に、固有、出費の二種に分類した根據は何所にあるであらうか。

一體私共が、初等幾何學で學んだ所によると、同一物は一にして一に限るのである。故に、言葉の嚴密な意味に於ては、存在するすべてのものは、互に區別され得べきものなのである。だが併し、吾人は、かゝる異なる存在物相互の間に、物理的乃至社會的な共通相をねらふことによ

48) Cantillon, Essai sur la nature du commerce en général. première partie chap. X. 及び seconde partie. chap. II.

つて、一の綜合をなしうる。又一度構成せられたる綜合概念は、之等二物の、物理的社會的異相をねらふことによつて分析し得るのであるが、如何なる同相をねらふかによつて色々な綜合の可能な様に、如何なる異相をねらふかに従つて、無數の分析が行はれうる。實際何人かによつて行はれたる分類とは、畢竟かゝる無數の可能な分析の一つに外ならぬ、と私は考へて居る。

かくして、所謂分類は、如何なる物理的、社會的性質に着眼するかによつて、色々に行ひ得るのであるが、吾人が日常の生活上無意識的に行ふ分類は素より、所謂學者といふ専門家が學問上意識的に行ふ分類も亦、結局本人が主張せんとする目的に對して、都合の良い様に分析を行つて居るにすぎない様に思はれる。

今、ルトローヌのなせる固有價值、出費價值の分類も亦、同様、私見によれば、彼等フイジオクラートが、主張せんとする最後の目的に適應して分類されたものである。従つてその意味を十分に理解する爲めには、勢ひ彼等の最後の目的の何たるかを明にしなければならぬ。今こゝには必要の限りに於て、且つ私の解釋する所に従つて、その目的を明にし置くであらう。

彼れ等の目的とする所は、一國の繁榮を齎さんがために、經濟政治に指針を供せんとするにある。⁴⁹⁾即ちそれは、政治に指針を供するに存するのであるから、一切の經濟現象の綜合分析も、亦指針として役立ち得るものでなければならぬ。又それは、私利を實現せんとするものでなく一國全體の繁榮を目的とするものであるから、勢ひ一國の總生産が問題となり、常に再生産がその見地とならなければならなくなる。

今以上の如き目的を以て、經濟體の分析に志す彼等が、一の社會内部に於ける財の流通分配を問題とする前に、先づ以て自然を社會全體に對立せしめて觀念し、自然の懷から、社會の懷へ、年々新に運ばるゝ財の分量如何を問題として知らんと欲したのは、素より自然であらう。

彼等が、生産といひ生産物といふのは、例外なく、この自然より社會へ年々新に入り這む財を意味し且つそれのみを意味する。⁵⁰⁾

彼等が勤勞階級を二分して、生産階級と不生産階級となし、前者は、固有の農民の外、漁民、獵人、及び鑛業者を意味し、後者は然らざるもの、例へば、工人、商人、教師、醫師、藝人等を意味せしことについては、改めて申す迄もない。たゞ彼等が何故に、所謂不生産的勞働の效用を十二分に承認しつゝ、あくまでその不生産性を主張したかの理由に至つては、當時にあつてはマブリー、コンディヤック、フォルボンネー、スミス等の理解に苦しめる所であり、今日殆んどすべての經濟學者の、誤謬として却くる所である。

僭越の様ではあるが、私は、以上の諸學者が、すべて十分に、フィジオクラートの、生産、不生産の意味を理解して居ない様に思ふ。而して理解出来なかつた理由は、主として、其の分類の背後に存する、最後の主張——何の必要があつてかゝる分類をするに至つたかといふこと——を、考へなかつたに基くと考へられる。素より人は何人も誤をおかす。けれども、文化の頂點に達した十八世紀の佛蘭西で、コンディヤック、フォルボンネー、ランゲー、ボルテール等々の學者のするどき批評の後に於て、ケネー、ボードー、ルトロヌ、ル・メルシエ、チュルゴー等の卓越

50) Daire の脚註。Physiocrates I. introduction. S IV.

せる理論家實際家達が、あく迄もその主張を棄て得なかつたのには、相當に強い理論的の根據がなければならぬ。少くとも、今日普通に考へられて居る程タワイもないものでは、あり得ないと思へるのが、常識にも合するものと思ふ。

それはさて置き、彼等の目的とする所は、前にも述ぶる通り、一國の再生、生産状態を明にして——以て經濟體の健康を診斷し、——よつて政治の指針を供するにあつたので、如何なる勞働が效用あるかを明にせんとするにあつたのではない。此點は前以て十分に理解しなければならぬ點である。

若し如何なる勞働が效用ありや、を問題とするならば、農、工、商の勞働は勿論、藝者娼妓の勞働と雖も等しく效用があり、其間何等の區別をなす必要がないであらう。それ等はすべて他人のための欲望を充す力を持つものであり、而してそれ等欲望の性質は、それが胃の腑から生れるか、幻想から生れるかは、毫も效用たる事態に影響をもつものではないからである。

然し乍ら、一國の繁榮を願うて、政治に指針を供するため、一國の再生生産量を測定し、經濟體の健康診斷をやらうといふためには、一切の勞働を無差別に、效用といふ概念で一般化して満足する譯には行かない。もし效用の増加を以て生産と考ふるならば、藝人の増加も亦、之を一國再生産の増加として數へねばならぬであらうし、又恐らくは概念の遊戲に墮するであらう。

かくして教師や藝人の勞働を以て不生産となすことは、なほ、何人も理解に苦しまぬであらう。たゞ何故に商工業の勞働を以て不生産なりとして、農業勞働より區別しなければならなかつ

たか。私見によれば、その理由の主たるものは、「政治の指針」たらしむるといふ、最後の要求を根據とするものである。經濟政治の指針たるがためには、一國の再生産狀態を測定しなければならず、而もかゝる測定を完成するが爲めには、商工勞働を農業勞働と同視するときは、二重三重の計算を避け難く、結局、經濟體の診斷は不可能となり終るからである。例を以て説くであらう。

今吾人が、一國の年々の輸入貨物の量幾程なりやを測定せんとすれば、所詮は之を税關に於てするの外はないであらう。一度輸入品が税關の門を潜つて、内地に入込んだが最後、それは最早、何れの地點に於て如何なる方法を以てするも、その量の測定は、物理的に不可能である。かりにそれが完成品であると假定しても、それは今年新に輸入されしものか。それ以前に入込める物なりやは見わける事が出来ない。原料として輸入され内地で完成された商品については、事情は更に複雑である。その製品の組成の一部分は、今年度に輸入され、他の一部は昨年度に輸入され、更に他の一部は内地で生産せられたといふ具合で、到底その年々の輸入量を測定しうべくもない、それは工場の中で調ぶるも、都市の店頭で調ぶるも同じことである。そして結局税關の構内で調べるの外に道はないであらう。

然るに同様の不便は、一國の總再生産量如何を調査する場合にも存する。勿論農民の手によつて自然の懷から社會の懷へ運ばれたばかりの財は、社會内に於てなほ幾多の加工乃至運搬等を経なければ、吾人の生活欲望を充足し得ないのが普通であり、それはフィジオクラート自身の到る所

に主張して居る所である。だが併し問題は、效用の増加如何にあるのではなく、年々の再生産量の測定に存する。今かりに加工後に於て、再生産量を調査するとすれば、輸入量の調査に於けると同様、仕上げ品の一部は去年度に、他の一部は一昨年度に、更に加工労働は今年度に生産されて居るといふ具合で、年々の再生産の測定は到底之を行ひ得ない。敢て之を行ふとすれば、昨年すでに原料として一度計算せしものをば、今年仕上げ品として二重計算をしたり、或はすでに都會の店頭で一度計算に入れたものを今年又田舎の店頭で二重三重の計算をなすを免れ難い。そこで結局、輸入品が國の入口たる税關で調査さるゝの外なきと同様に、一國年々の再生産も、亦、自然より社會への入口に立てる者の手に於て之を調査するの外に道はない。フィジオクラートが、生産階級又は農民と稱するものは、かゝる社會の入口に立てるものゝ意にして、従つて今日原始産業と稱せらるゝものに従事する一切の者を含み、又彼等が、この階級のことを屢々『第一の手』*première main* と呼ぶ所以はそこにある。かくして、生産的労働を不生産的労働より分ち、生産的支出を不生産的支出より分ち、生産階級を不生産的階級より區分せると同一の理由——即ち一國再生産狀態の測定の必要——によつて、彼は、固有價值を出費價值より分つに至つたものである。

『固有價值とは、生産物（フィジオクラートが生産物といふ場合には常に未だ加工を経ざる生産物を意味す——山本）が他の生産物との間に持つ交換割合であり……』

『水は一の有用なる財ではあるが、併し一の固有價值を有つには餘りにコンモンである。……』

たとへそれを汲みに行く労働が、それに一の價值を附與する (communiquer) としても、それはたゞ純然たる出費價值 (valeur en frais) にすぎない。

『小麥は一の固有價值 (une valeur propre) を有し、若しそれが運送せらるゝ時は、その出費に基いて價值を増加する。併し一國の富をば、耕作の回收及び收入 (produit net) といふに同じ——山本) の形成との關係に於て計算することが問題となる場合には、右二種の價值のうち、前者(即ち固有價值——山本)のみを考慮すれば足りる。然るに水は一の出費價值より持たぬ。此の問題は、人々が考へるであらう如くしかくどうでもよい問題ではない……』(註)

(註) 「再生産總量を測定するに農民の手に於てする」といふフィジオクラートの見解に對して、次の如き異論が期待されう。『例へば吸島といふ巻煙草について考へて見よ。成程中身たる煙草の材料はもと自然より農家の労働によつて收穫されたものであり、外包たる紙の材料も、もとは、農民によつて土地から引はなされたものではある。併しながらそれ等の材料が自然の手をはなれたまゝでは、なほ吸島の巻煙草といふ一個の富は存在しない。煙草として、即ち一個の享受し得る財となる爲めには、幾多の加工労働が加へられねばならぬ。それが享受しうる状態に至る以前には、まだ富そのものが生れて居ないのであるから、富の計算は之を享受しうる状態に於て計算すべく、それ以前に計算し得ない』と。然るに私見によれば、かゝる質問には次の如く答へうと思ふ。即ち若しかくの如く、享受し得る状態に於て初めて富となすならば、吸島の巻煙草が工場で出来上つたといふだけでは未だ享受に適しない。更に消費者の手元へ運ぶ労働が加へられねばならない。又マッチを求める労働も加へられねばならない。否、嚴密にいへば、煙草とマッチがとゝのへられたといふだけでも十分ではない。煙草の包を切り、その一本を口にあて、マッチをすり、煙草に點火し、更に之を吸込む瞬間に於て、眞に享受に適する状態に達したものだといふべく、それ以前の一切の状態はまだ享受といふ最後の目的から見て、一樣に準備の状態、未完成の状態

にすぎない。材料が自然をはなれて、享受される迄の全行程から見れば所詮は道の中ばにすぎない。今社會の經濟の健康を診斷するため、換言すれば富の再生産の盛衰を見るため、之を全行程——その始點は農民の手であり、その終點は消費者の肉體である——の何れの地點に於て、之を把握するが、最も便利かといふ問題に歸着する。而してフイジオクラートは、先づ一切の二重計算を避くるがために、その始點に於て把握しようとなすものである。

以上述ぶる所により、彼等の思想の解釋上最難關の一たる生産、不生産の區別と關聯して、所謂固有價值出費價值の區別の意義を説明して、一國再生産量測定の必要を主たる根據と解した。だが併し問題はなほ残されて居る。一國の富の再生産の計算に於て何故に固有價值（農民の手に於ける價值）のみを考慮すれば足りるといひ得るか。測定の便宜のために所謂『第一の手』に於て之を調査するといふことから當然に、第一の手で見れば足りるといふ結論は出ない。ケネー自身もいふ『一農業國民の年々の富の計算は、其の農業生産物の第一の手の賣上げ價格に歸着する。』ルトローヌは云ふ、『富の上に影響するものは第一の手に於ける價值の外にはない』と、又曰く、『價值のすべての種類は、同種のものではない。富の量を増加するものは第一の手に於ける價值の外にはない』と。これ等の主張は、單に再生産量測定の便宜の外に、更に強い理論的な根據がなければならぬ。私は、其の理論的根據をば、價值と再生産との關係を述ぶる次節に於て之を取扱ふであらう。

五　價值と再生産との關係

52) Physiocrates. p. 72. (Oncken; Oeuvres économique et philosophique de Quesnay. p. 322) 53) Ibid., p. 302. 54) Ibid., p. 302. 303.

「人は價值に依るの外、再生産を改善し得ない」。⁵⁵⁾「價值は一國の状態の檢温器なり」⁵⁶⁾等々の文句は何を意味するか。更に又「富の上に影響するものは、第一の手に於ける價值の外にはない」⁵⁷⁾とは、如何なる理論的根據の上に主張されて居るか。以下これ等の點についてのルトロースの見解を明にするであらう。

フィジオクラートが、工、商、醫、藝人等を一括して不生産的階級 *classe stérile* の名を以て呼ぶ場合、そこに何等の道德的批難を意味せざると同様、彼等が、原始産業に従事する者を呼ぶに生産階級 *classe productive* の名を以てする時、それはまた、何等道德的推賞の意を含むものではない。即ち彼等は、すべての人類の經濟活動が、等しく利己的動機に基くことを認むるのである。「すべての經濟は、個人的利益の上を廻るにすぎない。ある者は、あらゆる種類の勤勞を購ふべき手段を増加せんことに、他の者は、勞賃を儲けんことに熱中する。」⁵⁸⁾ *Toute l'économie politique ne roule que sur l'intérêt personnel. Les uns s'empressent de multiplier les moyens d'acheter des services de tout genre, les autres de gagner des salaires.*

而してこゝに、ある者といふのが、所謂生産階級を意味し、他の者といふのが、所謂不生産階級を意味することは申す迄もない。生産階級が生産増加に専念する所以のものは、決して社會人類を益せんとする利他的動機によるものではなく、自己の生産物を以て、出来る限り多くの、他人の勤勞を購はんとする利己的動機によつて然るのである。換言すれば、生産者をして、その個人的欲望を充しては「他人の爲めにも勞働に従事せしむる所以のものは、享樂の望み *le désir de*

55) Ibid. p. 898.

56) Ibid. p. 901.

57) 上掲。

58) Ibid. p. 898.

joint の外にはない』のである。⁵⁹⁾即ち享樂の望みを實現するが爲めには、他人の勞働又は勞働によりてつくられたる物を購はねばならず、購ふには對價を拂はねばならぬから、そこで止むを得ず、再生産に専念するといふ結果にならざるを得ないのである。

再生産の動機がすでに斯くの如くなる以上は、再生産が引續き行はるゝが爲めには、必らずや『それが、生産に従事するものにとつて有益でなければならぬ』⁶⁰⁾換言すれば、生産物はたゞに賣られ得るに止まらず、『少くとも其の前拂を回收しうべき價格に於て賣られなければならぬ』⁶¹⁾而して『それは何にも先んじて必要なものであり』⁶²⁾然らずんば『人は最早再生産を繼續する爲めに、同じ勞働及び同じ資本をつゞけるの意思も可能も持たぬであらう』⁶³⁾からである。フイジオクラートが、再生産のために、常に生産物の『適當なる價格』le bon prix を主張し、又ルトローヌが、『價值に依るの外再生産を改善し得ない』といふは、かゝる意味に外ならない。ジー・ペー・セー (J. B. Say) の『販路説』乃至は今日普通にいはるゝ『需要の生産力支配』に關して、フイジオクラートはすでに可成十分な理解を持つて居たのであり、私も亦今少しこの點を詳説したのであるが、それは他日、彼等の『再生産的見地』を獨立して取扱ふ場合に譲るであらう。

かくして、彼等フイジオクラートが、農業の手に於ける價值考慮の大切なるを説くのは、直接には、農業の再生産を維持せんが爲めなのである。然るに彼等が、農業者の手に於ける價值、其の再生産狀態を考慮すれば、足れりとなし、工商業者其他の手に於ける價值の考慮を一國の再生産測定上必要なしと考ふるに至つたのには、私は二つの根據を挙げ得ると信する。第一の根據は、

59) Ibid. p. 898.
63) Ibid.

60) Ibid. p. 898.

61) Ibid. p. 893.

62) Ibid.

彼等が農業を以て百業の基と考へたるによる。ケチーが其の『經濟表分析』の冒頭に、『農興れば百業共に興る。農衰ふれば——其衰因の如何を問はず——海陸の業、俱に衰ふ』⁶⁴⁾といふソクラテスの言葉を題して居るのは、今更いふ迄もなく、それは屢々彼等によつて反覆せらる思想である。百業の興亡が農業の興亡に依存すと考ふるかゝる思想の所有者達が、一國の繁榮、總再生産の維持のために、農業の手に於ける再生産、その手に於ける價值の維持を考慮して十分なりとなすは、容易に理解し得べきことである。更に第二の根據は、農業以外の一切の勞働が、農業の手に於ける價值の増加と獨立して、それ自身で價值を増加するものに非ず、となす理論に存すると考へられる。

いふ迄もなく、すでに價值の原因に關して述べた通り、一切の商品に於て、其製造に不可避なる出費は其の商品の價值の構成要素となるものであり、且つかゝる價值構成に參與する出費は、『農業の出費たると商工業の出費たるとを問ふものではない』⁶⁵⁾。だが併し商工業等の出費が、加工品の價值の構成要素となり得るがためには、一の必須の條件がある。必須の條件とは即ち、社會内に、商工業者以外の者が居つて、その商工業者の出費を支拂ふといふことである。換言すれば彼等の勞働をば、支拂ふに足るだけの價格で、その物を買取る者が、社會に存在しないならば、彼等の勞働は價值の構成要素となることが出来ない譯である。然るに、かゝる、商工勞働を支拂ふ人は、彼等以外の階級たる『所有者階級』及び『生産階級』であり、又支拂ひ得る物は、結局農業生産物以外にはあり得ない。故にかゝる見地に立つ限り、農業者の生産物が増加せざる限り、商工業者の勞働が事物の價值を増加することは不可能である。かくして一國全體の再生産は、たゞ

64) Analyse du Tableau économique. (Daire; Physiocrates; p. 57., Oncken; Oeuvre économique et philosophique de Quesnay. p. 305) "Lorsque l'agriculture prospère, tous les autres arts fleurissent avec elle; mais, quand on abandonne la culture, par quelque cause que ce soit, tous les autres travaux, tant sur terre que sur mer, s'anéantissent en même temps.

に素材の見地に於てのみならず、價值の見地に於ても亦、農業者即ち第一の手のそれに歸着する。ケネーが『農業國民の年々の富の計算は、その農業生産物の第一の手に於ける賣上げ高に歸着する』^{m)}といふのは、正しくかゝる理由によるものであり、従つて一國の再生産を維持せんがためには、ひとり農業者の手に於ける價值を維持することによつて、その再生産を維持しえへすれば、足りることになるのである。

私は、最後の點に關するルトロースの説明を引用してこの拙稿を閉ぢるであらう。なほこの最後の點については、和歌山高商學會雜誌『内外研究』第一號所載の拙文『柳田民藏氏の經濟表の批評を評す』中の再生産總量に關する項を參照して頂き度い。研究の途上にある拙き二文に對し、折角大方の批正を待つ。

『工業階級によつて原料に對して加へられたる形態が、其の原料の上に、一の價值を附加することは事實である。併し見通してならぬことは、其の價值が何處から來るかといふこと、即ち其の價值を負擔するものは誰か、といふことである。工業者は(彼等以外の——山本)他の人々が支出することを欲し、且つ支出し得るだけより、受取ることは出來ぬ。それは支出の置換へに過ぎないものであつて、何等新たな生産ではない』ⁿ⁾『農業と工業との本質的區別は、其の前拂を補償するものが、農業では自然であるのに、工業では(同じ社會の人間たる——山本)買手に外ならぬといふことである。この買手は、最初の勞働(農業勞働を指す——山本)が生産せる富を以て工業の支出を補償するにすぎない。……彼等は其の存在を他人の欲望に依存させて居る。彼等は、他人が支拂つただけより、其の出費を回收することは出來ない。』^{o)}(一九二八・二四)

(附記) 前號一一二頁三行目「するに止らず」は「するに至らず」の誤植につき訂正す。

SOCRATE dans Xénophon."

65) Physiocrates. p. 893. 66) 上掲。

68) Ibid., p. 941.

67) Ibid., p. 940.